

意見交換の概要
(令和2年7月29日(水)・新居浜市消防防災合同庁舎)

1. HACCP制度の猶予期間の延長について

飲食業を四国中央市で40年程営んでいる。知事にHACCP制度の猶予期間の延長についてお願いしたい。

平成30年6月に食品衛生法が改正され、全ての食品事業者に令和3年6月1日よりHACCP制度が適用される。この法律の改正はコロナ禍以前に成立したものだが、食品衛生のレベルアップを図るため、われわれ食品事業者においても、その期限を守り対応しなければならないことは重々承知している。しかしながら、食品事業者の現状は、コロナウィルス感染症の3密回避の影響からお客様に利用していただけない状況が続いている。最近になって、ようやく客足が戻り始めたところだが、長い不況に耐え、これから本腰を入れて経営再建に取り組まなければならない食品事業者の窮地を御理解いただき、HACCP制度の猶予期間の延長を1年ないし、できれば2年延長していただければ、われわれ飲食業界においても大変助かると思っている。業界に寄り添った対応を是非お願いしたい。時期を逸することのないタイムリーな対応を期待している。

【知事】

これは国の制度の問題なんですけれど、恐らくオリンピックを視野に入れて国が法律を作って国が一気に食品衛生業界のレベルを上げるということで導入した経緯があると思います。国の法律なんで、現状がどうなっているか、どう議論されているか、国会が閉じているんでわからないんですけど、オリンピックを視野に入れたというような当初したことを考えれば、1年延長になってますし、どうなるか分かんない状況なんですけれど、理論的には十分そういった要望が出せる環境ではないかなと、自分の個人の立場からは思います。ちょっと調べてみますけれども、そういった声というのが、日本全国の食品業界で起こっていると理解してよろしいでしょうか。

(参加者)

はい。

【知事】

そうすると、それは、国に対しての要望として出てきているわけですね。

(参加者)

出てると思いますけどね。

【知事】

その辺が確認できれば、例えば知事という立場で知事会レベルで組上(そじょう)に載せていただいて、知事会としても、現状こうじゃないか、と要望を上げやすいので。調べさせていただいてからアクションをさせていただいたらと思います。

(東予地方局健康福祉環境部保健統括監)

HACCP制度の導入の延期ということですが、これに関しては、県としても全国保健所長会に要望事項として出しているんですが、猶予が延長されるという話は今のところ聞いておりません。そこまでの情報しか入っておりません。

【知事】

分かりました。そういう状況であるならば、知事会への議題にも上げていいんじゃないかなと思うんで、県として私の方からも発言するようにしていきたいというふうに思います。

外国からインバウンドで大勢の方が来るという想定、オリンピックを契機にさらに増やすという6,000万人構想の一環としてこれができていると思いますんで、そういう未来図というのは、そう簡単に回復することはないと思いますし、これからの旅行業界、旅行業界もそうなんですけ

れど、インバウンドが愛媛県もかなり順調にいったんですが、今、もう国際路線も全部、各地方は止まってますから、インバウンドが回復するというのはかなりの時間がかかると思いますので、そこを考えた場合、国会議員のセンスの問題だと思いますけれど、そこに思いを馳せれば、理屈の上で延長という選択肢はありと、個人的には思いますんで、声を上げさせていただいたらと思います。

《補足説明》〔保健福祉部〕

厚生労働省等に確認したところ、食品事業者や関係団体から同様の要望はなく、全国的にもそのような動きはないとのことであり、全国保健所長会の要望は、新型コロナウイルス感染症対応で業務が逼迫している保健所への配慮と支援等を求めるものでした。また、HACCP制度は、食の安全安心を確保するための自主衛生管理の手法であり、早期着手が望ましいことから、知事会等における経過措置延長についての提案は見合わせることにしました。

2. 文化、芸術で地域を盛り上げることについて

2014年から始めイベントも何も介さない市民の手づくりで、費用も協賛金とクラウドファンディング等で賄い任意団体の自主運営でイベントをやっている。今年コロナの影響がなければ7回目の開催だったが、年々規模が大きくなり来場者が2,000人ぐらいあり、そのうち80%ぐらいが市外の方々ということもあって中止にした。地元から文化、芸術を盛り上げていくというために立ち上げたが、逆に地域の妨げになってる面があり、本当に地元のためになっているのかなという悩みもある。地元が一番熱意が薄い。いいアドバイスがあれば伺いたい。

【知事】

音楽が中心のイベントですかね。

（参加者）

音楽と地元の飲食店、県内から出店を募って、店舗があるお店に出店してもらおう。

【知事】

出店は西条市だけではなくて…

（参加者）

松山市からも。お店さえ構えていれば出店できるので。

【知事】

音楽の自主イベントで2,000人というのはかなりの規模になっているのかなと。参考になるかどうか分かんないですけど、地域のためになるイベントかどうかというのはまだ見たことがないから分からないんですけど、例えば僕が松山市の仕事をしている時に、五明地区とって山の奥ですけれども、そこはホテルがすごくたくさん飛ぶので、それを生かして移住した若者から相談があって、何かイベントをやりたいと。それはいいんじゃないのと一緒になって協力して立ち上げた経緯があるんです。ホテル祭り、五明ホテル祭りというんで、最初の第1回は200人ぐらいしかいなかったんですけど、今は1,300人くらい常時来るようになりました。その時に実行委員会を地元の人がメインでやっていて、それからかなりいいレベルの音楽関係者が「あの雰囲気がいいね。」とお寺のお堂でやるんですけど、そこにスポットをあててお堂でやる幻想的な雰囲気がいいというので割と面白いミュージシャンたちが毎年来るようになって、ここはかなりレベルが高いんですよ。仲間たちで認め合っている人しか出てないので、その音楽を聴きにまた人が増えていく、というようなことで続いていたんですね。これはまさに地元の手づくりのイベントでいいねと言っていたら、肝心のそこは高齢化が進んでいまして、実行委員会のおじいちゃんおばあちゃんが「われらは無理や。」というんで20年、20回やったんだけど去年でやめることになっ

たんですね。やめる時に僕は行って、「やめるな。もったいない。ここまで20回も続いてきたイベントをこれで閉じるなんてあまりにももったいない。もう1回考えてくれ。」と言ったら、隣の集落の人たちが若干こちらよりも年齢が低いので、「わしらが引き継いでやる。」ということになって、無事来年からリニューアルで同じような形でやるということに決まったんですけども、やっぱり地域の方々がそういった実行委員会の中にたくさんいるということが、まず地域のイベントが長く続く大前提かなと思いました。

それからもう1点は、これは全然関係ないんですけど、音楽のイベントで僕が興味があったのはフランスのパリの地下鉄ミュージシャンという存在なんですね。もともとパリの地下鉄の駅の構内で勝手にみんながジャカジャカやって、レベルの低い人もたくさんいて、通行人が「なんとかしろ。」って大問題になった歴史があるそうです。そこでパリ市が何をやったかと言うと、毎年地下鉄の駅で音楽を奏でることを許可する「許可証」を発行するようになったんですね。その許可をもらえれば1年間弾けるようになる。ただし、それはオーディションなんです。オーディションでパスした人のみに1年間自由に音楽が奏でられる許可が下りるんですね。オーディションでかなりそこからプロになる人も出てくるレベルですから、うまいんです。そのレベルの人たちが今地下鉄ミュージシャンとして活躍しているんですけど、誰も文句を言わないんですよ。うまいから。それでレベルが上がって、要は許可証がない人は演奏できませんからそういう人たちが排除されて、レベルの高い人たちが集まる。しかも、それが全国のプロの目にもとまって、そこには掘り出し物のミュージシャンが隠れているというのでスカウトが来たり、そこまでいっちゃったんですね。これなんかは非常にいい成功例かなと思うんですけどもね。

何がいいかわからないけど、僕も松山市の仕事をしている時に、松山市の音楽関係者と一緒にごういったイベントを何回かやったことがあるんですけど、まあ大変ですね。カレーをつくってくれて言われて、屋台にカレーを出して、250杯売りました。でも参加すると楽しいんで、できれば実行委員会がどういう方々でやっているかわからないんですけど、できるだけ地元の人を引きずり込む、それから今言った工夫をして参加者の音楽のレベルをある程度担保することが必要なのかなあと思いましたね。

3. アユのぼりの設置許可について

私たちは13年ほど前から金生川ラバーズという団体を立ち上げて、四国中央市の2級河川である金生川の清掃活動を年3回しながら、地元の人たちや小中高校生と一緒に草引きをして、地元の人に四国中央市の良さを知ってもらおうと頑張っている。

四国中央市は紙の町であり、30年ぐらい前は川の色が今日はピンクとか青とか白濁していたとか、『今日はあの紙屋さんは何色の紙を染めているなあ』というのがとてもよく分かるような川だったが、掃除をしたりアユの稚魚の放流を30年前からやったりして、川がとてもきれいになり、今はアユが遡上して帰ってきている。ソロプチミストとしても毎年何千匹のアユを放流して、今はすみ着いていたり、遡上してきているアユもいて、四国4県から釣りに来られている方もいっぱいいる。

アユが泳いでいるのは皆さんなかなか見れないので、アユのぼりをあげて、地元の方とか近隣の方に知ってもらおうと思って、アユの稚魚を放流している。幼稚園児にペインティングをしてもらい、去年初めて60匹ののぼりをあげた。1列が60匹で、今年は倍にして120匹、2列あげた。結構反響があるけれども、悲しいことに低くガードレールからガードレールに向かってあげている状況である。最初にこれをする時に県にお願ひに行き、金生の小山公園から川向かいの向山古墳という四国でも有数の古墳に向けてしたいと、基礎をさせてほしいと設計図も書いて持って行ったが、なかなか許可が難しい。致し方なく、市にお願ひに行き、ガードレールならいいだろうと、今はガードレールの支柱から支柱にかけてぶら下げている状況である。

今から5年ぐらいかけて60匹ずつ増やし300匹を目標にしているけれども、許可が下りる方法があればご助言いただきたい。1年目は四国中央市の「あったかまちづくり事業」に応募し、補助金をいただいたが、毎年市のほうからというわけにはいけないので、何かいい補助金をもらえる方法があったら教えていただきたい。

【知事】

許可のことは僕もよく分からないんですけど、個人的にお聞きしたいのはアユの釣り場、釣るのは自由なんですか。

(参加者)

そうなんです。

【知事】

例えば、昔からアユ釣りのところは漁業権というのがある…

(参加者)

そうなんです。それで金生川も漁業組合に入らないかっていう誘いはあったんですけど、それだけアユがとれているんなら、と言われたんですけども、いろいろメンバーと相談したんですけどしぼりが強すぎて、それだったら自由に釣ってもらおうと。今はどなたでも、友釣りという釣り方さえすれば自由にどなたが来てもウエルカムで釣ってもらっています。

【知事】

知られたらみんな根こそぎとってしまうんじゃない？

(参加者)

だから大勢おいでるんです。でも気象の関係で去年はちょっと釣れなかった。私たちも皆さんに知ってもらおうと思って、お掃除の後にアユ釣りクラブさんが1年間何千匹ってストックしてくださいまして、お掃除の後に皆に食べてもらって、焼いて、「おいしいなあ。」とか「大きいなあ。」とか、このくらいのアユがいっぱいいるんです。四国中央市は四国の真ん中ですので、四国4県から来るので、これも観光のUP、人を呼ぶお手伝いができるんじゃないかと思ったりするんですけど、それにしたらもう少し高くあげろとか、こいのぼりのように、目立つところにあげろとか、周りから言われるんですけどもなかなかそれができなくて、2年目なんですけどちょっと困っています。

【知事】

河川の担当者。

(東予地方局建設部長)

いつも金生川ラバーズには河川の清掃について中学生、高校生とかと一緒にやっていただいていることについてお礼を申し上げます。今お話のあったアユのぼりの設置の許可につきましては、ちょうどアユの時期というのが川の出水時期にピッタリ重なります。そういったこともありまして、まずは安全第一ということでやはり高い位置につけていただいて川の流れが多くなった時には影響がないようにといったところ、それと堤防に影響がでないようにしていただかないと、本日も山形県のほうでは越水したりとか、こういう今の状況でございますので、やはり安全第一という観点でこちらも見させていただいております。細かい実際の許可の要件といたしますか、どうしたら安全かということにつきましては、ご当地の四国中央土木事務所のほうに改めてご相談いただきましたらアドバイスさせていただけるとお思いますので、是非ともよろしく願いいたします。

【知事】

今意見を聞いて思うのは、確かに、河川は最近ご案内のとおり、温暖化の影響で異様な雨の降り方が続いているんですね。ですから河川管理は場合によっては人の命に直結しますので、もの

すごい神経質にはなっていることは事実なんです。だから安全ということを最優先にというのは分かっていたきたいことなんですけど、ただ河川を利用した町おこしも、今後活用としては国全体でもそういうことをやっています。ビオトープをつくったりですね、いろんなことをやっているんで、やっぱりどんどん相談していただいてこの場所はどうだとか、こんなやり方はどうだろうかとか、いろんな提案をされてみたらどうでしょうかね。今の話から言っても、何も無条件に駄目だということではないと思いますので。

もう一つはその地域の賑わいというものをバックアップする制度としては、これも市に上げていただくんですけども、「新ふるさとづくり総合支援事業」というものがあるんで、これは市でこれはいいというものを県に上げてくるので、あの制度がもし認定を受ければ助成金を県のほうからも出せる制度はあります。

(参加者)

ありがとうございます。知事さんも、もし四国中央市に来られることがありましたら 11 号線から 8 月末まで上げていると思いますのできっと見えると思いますので、是非ご覧になってください。お願いいたします。ありがとうございます。

《補足説明》〔土木部〕〔東予地方局〕

〔土木部〕

四国中央市を介して提案された金生川ラバーズのアユのぼり設置案について協議を行い、県からも治水上の支障が無い複数の代替案を提案しましたが、同団体の意向に沿えず、申請・許可には至りませんでした。

今後、同団体が再考し、新たな提案があれば速やかに対応します。

〔東予地方局〕

「新ふるさとづくり総合支援事業」では、市町や民間団体等が創意工夫して実施する地域づくり事業等に要する経費について、補助金を交付しています。

東予地方局では、東予の地域活性化に資する幅広い分野を対象としており、年度途中にも随時追加募集を行うなど、柔軟で機動的な補助金の交付に努めています。交付にあたっては、市町を経由して手続きを行う必要がありますので、地元の市町ともご相談いただき、積極的な活用をご検討ください。

4. 楽しむスポーツの推進について

スポーツ推進委員である。愛媛県は国体という大役を終わり、来年度 2021 年の東京オリンピックが予定されているけれども、スポーツは競技であり、わりと勝つことが目的とされがちだ。もちろん選手を育成していくのも大切なことだと思うけれども、これからの社会は少子化、高齢化社会で高齢者の人口ウエイトが多くなる。その中で、競技でなく楽しむスポーツを、老若男女が一緒に集い楽しむスポーツ、健康増進のために誰でもがルールとか難しいことを練習しなくてもすぐに飛び入りで参加できる、そういうスポーツを展開できたらなと思う。お孫さんと一緒におじいちゃんおばあちゃんが一緒に楽しくやれる、それと身障者の方も一緒になってスポーツを楽しめるそういうことができたらなと思う。

現在各地でニュースポーツや総合型地域スポーツなどが展開されているが、子どもたちにやらせてみて面白かったというペタンクとか、身障者の方と一緒にできるボッチャ、そういう親子でも子どもたちでも誰もが楽しめるスポーツがある。またゲートボール、その他、結構ニュースポーツの種目はここにきて大変増えている。

こういう、競技でなく楽しむ、誰でもがすぐに参加できる老若男女問わずに楽しめるスポーツを知事はどのように考えていらっしゃるか。また県としての取組みがあればお聞かせ願いたい。

【知事】

スポーツというのはもちろんする楽しさもありますけれども、見る楽しさがあれば応援する楽しさがあれば、支援するやりがい、楽しさ、楽しさと言っていいかどうか分からないけれども支援する楽しさもある。いろいろな効用があると思うんですね。

もう一つはスポーツを通じて人と人が結び付いていく。コミュニティの形成にも一役も二役も買う。そんなふうにスポーツというのは捉えています。僕自身も運動選手だったんで基本的には大好きなんですけれども、国体はそういう意味では、本当に長い年月をかけて県の財政に無理が生じない範囲で盛り上げていこうということでやらせていただきました。その時に一つ新しい会場をつくるというのはあまりにもお金がかかるので、既存の施設を改修して国体仕様にするというのを基本に置きながら、またいろんな工夫をしたんですけども、愛媛国体までの国体というのは、例えばボート競技なんかは、開催地が80艇ぐらいボートを新調で買わないといけないと義務化されていたんですね。それを愛媛国体からルールの変更の交渉をしまして、愛媛の次、その次の3県で3分の1ずつ買わせてくれと、3分の1買って愛媛で使って次の県でまた使って、次の県で使って、そして3分の1だけ元に戻す。そうすれば経費が3分の1で済むじゃないかというような発想でやったり、あるいは前年にやった岩手県で開会式の会場で使った台とかをただでほしいと言ってもらってきたり、工夫しながら国体をやりました。

ただその中で1点、ここはお金をかけようと思ったのが障がい者スポーツだったんですね。障がい者スポーツのあれだけの大会は、終わったらそれだけの規模で使うことがないんで、どこの県でもレンタルで、フライングディスクとかああいう器具をレンタルでやってたんですよ。これは後で活用できるんじゃないかと、障がい者の方々のスポーツにも結び付くし、障がい者の方がやるスポーツは健常者も楽しめて気軽にできる競技が多いんですね。ですから垣根を越えたスポーツレクリエーションにも活用できるんじゃないかということで、愛媛県の場合は全部買い取りにしました。その器具というのは全部各団体が持っていると思います。だからこれを地区ごとに活用されるってことができるので、そのあたりも調査してみたらいいんじゃないかなというふうに思います。

それともう一つは、僕らもグランドゴルフとかペタンクとかボッチャとか、これはもう誰でもが簡単に楽しめるスポーツだと思いますので大いに普及していけばいいのかなと思っています。余談なんですけれども、ゲートボールというのはすごく面白いけれども、すごく難しいじゃないですか。戦略とか第1ゲートを通らないと参加ができないとか、時間を見ながら相手の球を妨害したり外に送り出すとかいう駆け引きとか、いろんな要因があるんでそう簡単にはできないなと思いました。面白いんだけど楽しむためにはかなりの時間があるのかなと。意外と難しいのは、結構トラブルも起こるんですね。チーム制で第1ゲートを通らないと参加もできないので、「なんや！」という声が上がったり、相手の球に蹴飛ばされますから、外に出されると、その人は次のターンは参加できないですから、そこで「じいさん、よくもやりやがったな。」とけんかが起こったり、意外とやりにくいところがあるんで、そういう点、グランドゴルフなどは自分との闘いですから簡単にできる。だから種目を見極めて、ここは専門の方々がやる種目かなと。今言ったグランドゴルフとかペタンク、ボッチャなどは幅広くできるので、そこは地域のスポーツ協会等々で見極めて「これを徹底して広めていこう。」という流れをつくったらいんじゃないのかな。何も全県一律である必要は全くないので、四国中央市ではこれをお年寄りにまず広めていこうとか、うちはこの種目を中高齢者に広めていこうとか、そういうことを市町単位で共有したら普及が早いのかなという気がします。

（参加者）

今知事さんが言われたように、結構激しいのは高齢者はできないし、ピンボールなんか私がおやってもゼーゼーいいますからね。結構重労働です。そんなんで特に今海外から入って来るニュースポーツは我々でも分からないスポーツがどんどん増えているんですよ。そこらあたりでいろ

いろとチャレンジしているわけです。特に高齢者がどうしてもウエイトを占めてきますので、そこからあたりの取組みも今から大事になるんじゃないかなと思うんです。

【知事】

そうですね。結局のところは、例えば、日本の国は僕らの時代から次の時代は大変な試練が待ち受けていることは言うまでもないことで、それはやっぱりどこの国も経験したことのない少子高齢化社会の到来だと思います。この少子高齢化社会というのは皆あまり実感がないと思うんですけれども、あつという間に気が付いたら来るというような問題なんだと思います。例えば常識で考えれば、今の国の社会保障制度というのは年金にせよ、保険にせよ、働く世代が多くて福祉サービスを必要とする世代が少ないというピラミット型の人口構造の時代につくられた制度なんで、当然のことながら制度そのものはこのままいくと大変なことになる。人口は一時ドラム缶型になりまして、今は福祉サービスを必要とする方が多くて、若い人が少子化で少なくなる逆ピラミットになるだろうということになると、制度がもつはずがないんですね。これを回避するためには方法は3つしかなくて、1つは制度を変えないという前提で考えるならば、負担を徹底的に上げる。税金をとるのを上げるということでカバーするか、それが嫌ならサービスをどんどん削る。もうできませんということで減らす。それも嫌なら新しい道を模索するしかない。それは地域のコミュニティを強化して助け合っていくという、そして足らざることを公的なサービスでカバーしていくということを進めていかないと、どっちかになってしまうということなので、だから地域でのコミュニティがすごく大事になってくる。例えば医療費一つとってみてもどんどん増えていくなれば予防であるとか、健康づくりであるとかに重点を置いていく必要がある。その中でスポーツ、みんながやれる生涯スポーツの普及というのはその人の人生を豊かにするだけではなくて、今言ったような少子高齢化を前にした我々の社会が取り組まなければいけないテーマでもあろうかと思っておりますので、スポーツというのは一番幅広く人が集いやすい分野でもあると思いますから、是非力を入れて四国中央市という中で何をターゲットにするかを戦略的に考えて、普及に入ってもらいたらいんじゃないかというふうに思います。

5. 禎瑞の環境に対する取組みについて

禎瑞環境クラブの活動についてお話をしたい。禎瑞環境クラブは東は加茂川、西は中山川に挟まれた標高ゼロメートルの地域にあって四方が全部堤防になって三方が堤防に囲まれているので、その堤防には粗大ごみがすごく多く捨てられ、それを何とかしようと平成20年から多くの方のボランティアとか協力があり、堤防にシバザクラを植栽して今では西条市の観光スポットになっている。

将来はオンライン授業に進んでいくと思うが、自然体験授業が大切だと思っている。私たちは西条市の保育園、幼稚園で生きたお魚、カニとかタコなどに触れてそれを観察したりする場所をつくったり、ごみによる環境被害で生き物がすめなくなっている環境をすみやすい環境になるように学ぶ場所づくりなどにも取り組んでいる。今は子どもたちの中には魚は切り身で泳いでいるとか、若い親御さんは、魚は臭い、周りのことに無関心などのご意見が多くなっている中で、私たちは観察することで考えたり感じたことをそのまま素直に発信したり、食育では生きた魚を自分たちでさばいて食べることによって生きていくための栄養のある魚などに感謝をする心ができたり、いろいろなごみがあることを学んでごみをなくすることを考えたりする体験をして学ぶということ子どもたちに教えていきたいと思っている。

禎瑞には日本で5番目ぐらいの大きな干潟が広がっているので、今から教育の場として多くの小学生とか子どもたちに利用して勉強していただきたいと思っている。禎瑞小学校では干潟が近くにあり、干潟の自然観察会で生き物調査とか絶滅寸前の二枚貝の生育状況とか干潟のごみの清掃活動などにも取り組んでいる。自然豊かな禎瑞から発信できることがあればいろいろ

考えていただけたらいいなと思っている。知事さんのご意見をお伺いしたい。

【知事】

そうですね。まず、自然環境を利用した教育の問題の前に、ちょっと指摘のあった魚食の停滞、これは非常に愛媛県は水産県でもあるので、大変大きな問題だと常に思っています。

愛媛県というのは海岸線が非常に長い県なんですけど、面白いなあとと思うのは東予の海である魚と来島あたりの魚と松山近辺の魚、南予の宇和海である魚、全部種類が違うんですね。面白いなあと考えて、僕は子どもの頃に瀬戸内海は波が穏やかですから、そこにおける小舟浮かべてゴカイをさして糸釣りで魚釣って、それを船の上でさばいて食べるってのが何よりも豪華な食事だったんですね。あがる魚ってのは、当時はトラハゼ、ギゾ、ウマズラハギ。ウマズラハギなんかも雑魚のように釣れたんですよ。「またハギかい。」って「ハギはもういいや。」って戻っていたぐらいだったんですけど、今は超高級魚なんですよ。時代が変われば価値も変わるんだなあと思いますけれども、そんなところで育ったんで魚は大好きですね。愛媛県の南のほうに行くと長浜町というところがあるので、この辺りに行くと実はフグもとれるんですよ。ほとんど山口に持っていったりする。山口はフグが有名ですが、九州と愛媛から持って行ったフグも山口の下関フグとして売られている。だから長浜のほうに行くと老舗のフグ専門の店がまだ3軒ぐらいあって、フグの産地の匂いを感じられる空間がありますし、八幡浜に行くと今度はハモ、これはほとんど京都に行ってます。京都に出荷して今四国では八幡浜、長浜あたりが一番ハモがとれるんじゃないかなと思いますけれども、そんな産地もある。佐田岬のほうに行くと、今度はアジ、サバがとれるんですが、商売下手なのか豊後水道でとれるアジは大分にあがると関アジ、関サバで1匹3,000円、4,000円、5,000円。こちらが同じものをあげると岬アジ、岬サバで2,000円ぐらい。中身は全く一緒なんですよ。そんな恵まれた漁場がある。宇和海に行くと新しい養殖業がどんどん誕生しますから、ここは日本で最も海の深さと水温と黒潮の流れが養殖に適した漁場が広がっているの、実は愛媛県は海面養殖業がずっと日本で一番ということになっています。マダイに至っては日本で出回っている養殖マダイの50%以上が愛媛産ということで、そこにもいろんな種類がありますから、西条にしてもノリが昔は盛んだっし、新居浜あたりは白魚、何が一番とれるかな新居浜はアコウという高級魚がとれたり、もっと愛媛県の人魚を食べようよと言いたいですね。

おっしゃるとおり、料理しないから切り身しか知らない子どもたちも増えているけれども、これだけ恵まれた食材、その市だけじゃなくて西条市もさることながら愛媛県全体が故郷ですから、そこに魚という超のつく種類と質の高い魚が我々の故郷愛媛にはあるんだということを知って、魚食をどんどん推進して行ってほしいと思います。

今地域でも、もう一つ言えることは、愛媛県は東予と中予と南予で全然風景が違うんですね。その最も顕著な例が産業構造にあるんですね。東予はどちらかと言うと2次産業が強いんですね。ものづくり、工場が多かったり、四国中央市の紙産業があり新居浜に住友の関連の企業があり、西条には水を生かした先端産業や食料関係、造船であり、今治には海運、造船なりタオルなりがある。南予に行くところこういう工場はないです。大半が1次産業です。農業、林業、水産業、これが大半なんです。中予はどうかと言うとサービス業です。情報産業とか観光業とか3次産業。東予は2次産業が強くて、南予は1次産業が強くて、中予は3次産業が強い。これほど見事に3つの地域で業態が違うというのは全国でまれだと思うんですね。ここにこそ愛媛県の良さがあるなあというふうに思っています。

その中で東予にも工場が中心であってもいろんな自然環境もあるじゃないかということを経験の方々に知ってもらえればなあと思って呼びかけたのが「さんさん物語」というイベントだったんですね。

特に僕から見ると、東予に松山から来た時に昔から思っていたのは、山並みの美しさだったん

ですよ。

例えば西条だったら霊峰石鎚があって、ここは何度も登っています。日帰りでスキーにも行けるし、冬はですよ。そこに散らばる高原植物、自然の宝庫ですよ。新居浜に行くと今度は赤石山系が連なっていて、そこにはこの前盗難騒ぎがありましたけれども、ツガザクラという高山植物とか住友の歴史を味わえるような山岳コースもあったり、東洋のマチュピチュと呼ばれる別子もありますし、四国中央市に行くと翠波高原に至る山脈はまた別の味わいがある。聞いてみると地元の人ほとんど登ったことがないんですね。川も同じだと思うんですけども、どこもそうなんですけれども、灯台下暗しで地域の自然であるとかおいしいものや食材と言ったものを知らない方が多いというのは共通項なのかなと。人間の心理で他人の庭は良く見えてしまうということで、「あっちはいいね。」というふうなところで目が行きがちなんだけれども、一番大事なことはやっぱり地元の良さを知ることではないかなと思うんで、加茂川から中山川に至る河川のごみ、その価値を知らないからみんなごみを捨てに来るといった状態だったんだと思うんですね。

ただ皆さんの活動で植栽したり工夫されることでごみが大分減ったんですか。

(参加者)

堤防にはごみは全然ございません。シバザクラを植えた時点で、皆さんがそのシバザクラの花を見て、ごみがあれば自主的にそのごみを拾う。ほかにごみが落ちていてもそれを自主的に拾っていくという、コミュニケーションというか皆さんの考えが広まっていっているんで、禎瑞では一面に堤防もですけども小学校とか公民館の周りに全部花が植えてあります。四季折々の花を皆さんが協力して植えているので、禎瑞にはごみひとつ今はなくなりました。

【知事】

大変大きな成果だと思いますから、せっかくそこまで持っていかれているんですから、より一層輝かせるためには何が必要かをいろいろ皆さんで相談して、今言った潮干狩りとかはできないんですか？

(参加者)

二枚貝、アサリとかが全滅寸前で、ほとんど育たなくなっていました。それで私たち小っちゃいんですけど今アサリをかごに入れて養殖をしてみようということで、5年ぐらいになるんですけど養殖をして、手をかけてやればアサリは育つということまでにはなっています。

【知事】

それをどんどんできたら面白いですね。

(参加者)

そうですね。けどすごい手間がかかって、台風とか水が出たりするとアサリは死んでしまうので、それをいかに管理するかがものすごく難しいので、今災害とかそういうので山からの水が昔よりすごく多いので、なかなか干潟もだんだん悪くなっていく状態が続いています。なのでアサリが少しでも増えたらいいなあとということで県のほうでもいろいろ協力していただいて、こんなことをしたらいいんじゃないかということも少しは考えていただいているので、県のほうも協力していただいてアサリが増えるように私たちも頑張っていけたらなあと思っております。

【知事】

ありがとうございます。

《補足説明》〔農林水産部〕

○魚食について

水産物の消費量が全国的に減退するなか、水産県として、広く一般県民に、県産水産物や漁業に興味を持ってもらい、知って、見て、触って、嗅いで、調理して食べる機会や体験できる場を多く作り出すことが重要であることから、幅広い年代の集客が期待できる量販店や、地域に密着した催し等において、お魚教室、調理講習、メニュー提案、生産者との交流等のほか、フィッシ

ユガールによる県産水産物のPRイベント等を実施するなど魚食の普及啓発を行っており、今後も、水産県として様々な切り口で魚食普及を推進していきます。

また、漁協女性部では、高校生等とコラボした水産物加工品の開発販売や海の体験イベント等の実施など、魚食の魅力発信や普及啓発につながる活動に積極的に取り組んでいるほか、県漁協や一部の市町も魚食の普及啓発に取り組んでいます。

- ・魚食推進事業（H22～ ）
- ・漁村女性地域活性化支援事業（H21～ ）

○アサリの養殖について

水産資源の回復や増殖の観点から、干潟の再生は重要と認識しており、県では、まずは県内最大の西条地区の干潟再生を目指し、平成25年に漁業者、研究機関、県、市で構成する「西条干潟研究会」を立ち上げ、アサリ増殖に関する調査・検討を積み重ねており、現在、地元青年漁業者グループ等と連携して、増殖技術の実証に取り組むとともに、禎瑞地先において、川床砂による覆砂を実施し、生物生息環境の改善試験を行っています。

- ・アサリ増養殖技術生産性向上試験費（H30～R2）

6. コロナ時代の個人メディアの情報発信のあり方について

コロナ時代の個人メディアの情報発信のあり方についてご意見いただきたい。

昨年東予3市で「えひめさんさん物語」が開催されて、私もチャレンジプログラムの企画運営で参加させていただいた。現在は以前から行っている地域メディアサイトの運営やチャレンジプログラムで誕生したご当地のユーチューバーのキャラクターを利用して、普段会社勤めをしている仲間たちと愛媛県新居浜市の情報発信を行っている。さんさん物語の壮行会で、知事やさんさん物語の実行委員長がおっしゃっていたのは、地域の隠れた魅力の発信をまずは3年続けることを念頭に頑張っているところ。

私たちの役割は、直接メディアを見ていただき愛媛のことや新居浜のことを知ってもらうことに加えて、県内外の大規模なメディアにローカルの情報を供給することだと感じている。活動の中で新聞社、テレビ局、地方紙や大手のメディアサイトとお話しする機会があるが、取材の前にサイトをご覧いただいているようで、質問や大手のメディアサイトで「メディア提携しませんか。」という話をいただいている。

ただ、現在はコロナウイルスの感染拡大によって、僕たちみたいな個人メディアは、いろいろ発信したいという気持ちはあるが、コロナの脅威を県民、市民の皆さんに広げてしまうのではないかという思いと、SNSとか特にツイッターは同調圧力が強力なメディアなので、私たちがたたかれてしまうんじゃないかという不安がありながら、去年さんさん物語もあり、それ以前から続いていた市内での素晴らしい活動とか流れを断ち切りたくないという思いもあるが、このままだと活動を諦める方や、断念せざるを得ない状況が出てきそうなので、当たり前のようにあった愛媛の情報発信の方法が一つ減ってしまうのではないかと危惧している。

現在GoToキャンペーンで観光客の呼び込みも国が行っているが、感染者が全国で日に日に増える一方で、私たちみたいな個人メディアが県内で活動していくためにはどういったスタンスでこれから活動していったらいいか。

【知事】

難しいな。回答があるわけではないんですけども、そのメディアは何のために立ち上げたのかということがまず第一、大きなポイントなのかなと。地域の魅力を発信するということだろうと思うんですけども、だとするならば戦略もいるのかなと。例えばうちも愛媛県の宣伝をメディアに出す時に、やっぱりデジタルプロモーションの戦略というのを意識しながらやっています。

分析を行いながら効果的にリニューアルしたりするテクニックも駆使しているんですが、それでも一番大事なことは愛媛県の良さをアピールすることなんで、そこを間違いなく効果的にそれぞれの良さのコンテンツを把握するというのがまず第一。さっきも申し上げただけど、意外と地元の人が地元の良さに気付かないというケースは多々あると思いますね。ですからそこをよく練り込んで、祭りなんかは最高のコンテンツだと思うんで、そういったコンテンツを絞り込み磨き込みというものをしっかりと行うということ。それをどういう形で発信することによって閲覧者等々が増えていくのかという戦略も必要なのかなという感じがします。まあさっき言った祭りチャンネルとのタイアップも一つのルートなのかもしれませんが、そういう戦略、自分でつくって出すだけというよりは見てもらう人を増やしていくためにはどうすればいいかという戦略を練るということも大事なのかなと思います。むしろコロナでみんな閉じこもる時間が多くなってきているということは、そこに面白いメディアを見たいなという時間が増えているというように逆の発想を捉えれば、チャンスなのかもしれないという発想で仕掛けていくのもいいのかなというふうに思います。

ただこればかりは、何が当たるかというのは分からないので、まあ新居浜の良さ、そして磨き込み絞り込みを行って、どういうところを対象に発信していくかという戦略を練っていくというのが、まあ一つの個人メディアにおける基本なのかなと、これはあくまでも僕の個人的な思いですけども、そんなふうに感じました。ということで新居浜の魅力というものを掘り下げていくと面白いものがいっぱいあるわけで、例えば 10 年前にこの仕事に就いた時に、新居浜の若い人たちと、50 人ぐらいだったかな、懇談したことがあるんですけども、まあさっきの話、皆が毎日見ている西赤石山に登ったことのある人と言ったら 5 人しかいなかったです。ええっと思ったんです。毎日見ているのに登ったことがないというのにびっくりした記憶があるんですね。

これはどこでもそうなんです。松山市で仕事をした時に、坂の上の雲のまちづくりを仕掛けたんですが、小説を読んだことのある人、松山が舞台なんですよ、ほとんどいなかった。主人公の 1 人は松山北高の校長先生をされていたんですね。その校長先生の銅像があるんだけど、北高の卒業生に聞いたって学校時代何も教えられていないから知らないというような状況だったんですね。で、そこから掘り下げていくと、まず主人公たちが若い時に過ごした空間ですから、いろんなところに足跡が残っているんですよ。それが全部埋もれちゃっているんで、一つ一つそれを掘り起こして磨き込んでつなぎ合わせていくというまちづくりをやっていたんですね。そうこうしているうちに全国のドラマ化になったんで、わあっとなったんですけども、本当に新居浜だったらまずは何とんでも西赤石山、僕も何度か登りましたけれども、あそこへ行くとパネルがずらっと並んでいて、かつて山の上に 12,000 人ぐらいいたわけですよ。3,000 人、4,000 人を収容できる公会堂があの中にあつた歴史もある。大きな病院もあつた、何百人も通える小学校もあつた。それぞれの当時の写真が、登山道にずっとおいていつてくれているわけですよ。歩いている山道はよく見ると変わった色の石ころがいっぱい転がっていて、これは全部自然なものではなくて精錬の跡に出てきたカラミ石、そういったカラミ石が山道に所狭しと散見されたり、よく見るとそこに 2 本の溝が道の中にあるんですね。登山道に。「これは何？」って聞いたら、日本で初めてつくられたレールなんですよ。溝ってことは牛車を山道を行き来させるためにつくられた溝で、牛が引っ張ってくるんですけども、車輪がその山道の溝にはまることによってスムーズに牛車が銅を運べるようにした工夫の跡で、これが日本で初めてつくられたレールだったんですね。そうこうしているうちに銅山越まで行くと、さっき言ったツガザクラが散見される。日本で 1,800m 以下で生息しているツガザクラは全国であそこだけです。それを地元の人が価値としてどれだけ受けとめているか僕も分からないし、登山に行った時にいろんな人が行き来するんで、「どこから来たんですか？」と聞いたら地元の人には本当にいなくて、「大阪から来ました。」「岡山から来ました。」って人ばかりで、「なんで来たの？」って聞いたら「ツアーがある。」と言うんですね。「赤石山系、ツガザクラを見る一泊コース」とかそういうツアーまで、県外で価値

が知られて造成されているという。それは山道を行き来している人との会話から知ったんですが、これは何とももったいないことだなというふうに思いました。

あそこの銅山越を越えて西赤石山まで行くと、体力のある人は左のほうに下りていくところがあって、そこに兜岩がある。そこはシーズンによったら見事なツツジが咲き誇っているけれども、身近なところに価値あるものが山ほどあるんじゃないかなというふうに思います。

別子も最近は大いぶ整備されてきて、知られるようになってきました。結構旅行会社も、今はコロナ禍でこういう状況ですけども、注目をしている場所になりつつあるので、うまく情報を発信すれば非常に面白い効果が生まれるんじゃないかなと個人的には思います。

その他に、先日さんさん物語の時にはこれもいいなと思ったのは、大島からカヤックでこっちに帰ってきたんですけど、波が穏やかであるがゆえにカヤックにはもってこいの場所なんですね。そういう空間の利用の仕方にも可能性を感じましたし、あるものを価値をしっかりと見極めてどう生かすかということを工夫すれば、それはまた個人メディアの関心度の高い発信に結びついていくのではないかなというふうに思います。答えにはなっていませんけど、以上です。

7. 東予地域における新産業創出についての課題

新居浜機械産業協同組合青年部に所属している。四国中央市、新居浜市、西条市の3市の工業出荷額は愛媛県の約55.2%を占めており、それぞれに特徴があり、国内でも重要な産業クラスターを形成をしている地域と思われる。そういった意味でも新しいことに取り組むためのポテンシャルは県内でも最も高い地域であると思っている。

この地域で新産業を育て、新産業創造を担っている機関と言えば東予産業創造センターだが、松山市の愛媛県産業振興財団の炭素繊維やセルロースナノファイバーのようなトリガー産業の育成という面では見劣りがしてならない。東予地域の技術を集約連携させ、東予産業創造センターが新産業創造という本来の機能を発揮できるよう、またものづくりの町としてさらなる発展をするためにも是非愛媛県産業振興財団との相違等も踏まえ、バランスの良い組織の再編をお願いできないか。

また、新居浜で工業用地を確保しようとする、皆さん苦勞するという話をよく聞く。私も大型物件等を受注した場合、工業用地を確保するには毎回苦勞している。工業用地のほうが本当に不足しているのであれば、工業用地の整備なども必要かと思う。もし余裕等があるのであれば、用地の情報などを何らかの方法にて公開していただく必要があろうかと思う。ご検討いただきたい。

【知事】

東予創造産業センターは新居浜市さんが中心になって、県と西条市が出資する形で運営されていると思うんですが、松山市の産業技術研究所は県の施設、組織になります。そこは大いにタイアップしたらいいと思いますね。コアになる理由というのはいろいろあると思うんですけど、例えば四国中央市にある紙産業の研究所は大学と企業と連携して、特に今セルロースナノファイバーを実用化するための産官学連携の研究が進んで、少しずつ実用化に結び付いていってますし、要はテーマを何にするかがあれば動きが早くなるのではないかなというふうに思います。

たまたまさっき言ったカーボンの関係は、松前町に東レの工場があり、松山市の空港の近くに帝人さんの工場があり、双方ともカーボンの製造をやっていると。これがこれからの次世代の航空機であるとか、あるいは恐らく次の時代の自動車にも活用される可能性もあるので、そういった素材というものを武器にして何かしようということがそもそも発端だったんですね。幸い東予のほうには金属加工等々の技術力のある会社が多いので、その技術をカーボンの加工に結び付けることができないかどうか、あるいは、それを既存のものを切り替えることによって高性能な製

品を生み出すことができないかということは、これは県の仕事ですから、東予、中予、南予関係なく呼びかけて研究会が発足し、150社ぐらい参加している。その中から実用化されているものが出てきているところです。

ですから何かテーマがはっきりすれば、東予を拠点にというふうなことが可能になるんじゃないかなと。もちろん県の研究所とタイアップするのは、そこに県だ市だというのはないですから、すぐにできると思いますので、研究所、センターでも考えてもらいたいと思いますし、せっかく地元新居浜にはそうした組合がしっかりしていますから、その中からチーム力でこの分野で行こうじゃないかと。それをセンターにこういうことをしてもらおうじゃないかという提案を出していくということもいいんじゃないかなと思います。

それから土地の件は難しい話で、逆に新居浜市には僕は助けてもらった立場なんですけれども、最初四国中央市から発足したある会社、これは医療機器のセットをつくっている会社が最初四国中央市でと言ったんだけど土地がないと、県外に行くという話が入ったので「ちょっと待ってください。」と。それで新居浜市が隣なので土地を用意できないかということで探してくれて、四国中央市にはなかったんだけど新居浜市にあったんでその工場は新居浜に新設することになりました。これが一つ。

もう一つはある大手のコンビニが四国に進出するというのを聞いて、四国初進出ということもあったんで四国内に工場を2つつくるというのを聞いたんだけど、その両方とも愛媛県にはない。その会社の役員と話して、「一番マーケットが大きなのは愛媛でしょ、人口から言っても。にもかかわらず四国に来て愛媛に工場を2つのうちの1つの工場もないということであれば僕は知事として他のコンビニを応援する。」と。「出てきても県外コンビニとレットルを貼ってやる。」そんなことを言っていたら「愛媛県に1個つくります。」

だから最初四国中央市が高速道路の関係で土地を探したんだけどもないということで、また新居浜に「どっかないですかね？」って言ったら探してくれて、コンビニ関係の加工工場ができたということなんで、新居浜はまだいいなと思ってたんです。四国中央市がそういったことを受けて、今土居町あたりに工業用の土地を準備すべく、動きがどんどん活発化しているので、新居浜の状況の詳しいことが分からないんですけど、まだ探せばあるかなという感じはしています。

西条は、先日県が持っていた工業用地はCLTとって新しい木材の素材をつくる最新工場を建ててくれたことによって、1つ埋まったんですけども、全体的にはまだ若干余裕がある。どんな？東予地方局。県のほうは、市のほうはある？

(東予地方局産業経済部長)

新居浜市の関係ですね、県のほうでもホームページで市とか不動産関係等を公表しているんですけど、新居浜市のほうも数件公表させていただいております。

【知事】

まだあるの？

(東予地方局産業経済部長)

はい。20日現在の資料があるんですけども、2件ほどは公開させていただいております。

【知事】

あとはこれからの時代の中でどういう工場の形態が時代の中で求められていくのか。例えば、随分変わってくるかもしれない。通信技術の発達によって。その中で戦略としてその地域がこの時代の流れの中でこういう工場を誘致しようとか、戦略を描いてそれによって必要とされるような土地がどうなのかという議論に入っていくって、だとするならば今の既存の中で足りるのか足りないのかということになって、足りないんだったら造成しようという段取りになってくると思うんで、そのあたりよく分析されて、業界としても投げかけられたらどうかなと思います。

《補足説明》〔経済労働部〕

産業技術研究所では、これまで東予産業創造センター等と連携し炭素繊維関連産業の振興に注力してきました。

平成 28 年からは新たな地域資源としてセルロースナノファイバーについて県内企業と連携して研究開発を実施しており、これまで 11 件の特許を出願する等実績があります。その取組みは今年度の全国知事会の先進政策バンクで優秀政策を受賞しました。

今後は本事業成果を実需に結び付ける必要があります、そのためには地域の支援機関の連携が不可欠となることから、東予産業創造センターとも連携を密にすることで、新居浜西条地域のものづくり企業の支援拡充に努めます。

なお、工業用地の情報については、県 HP 内に「企業立地ガイド」の専用ページを設けており、東中南予の地域別に、面積や売却希望価格、その他立地条件を公開しています。

8. 愛媛の知名度向上について

私は松山の出身だが、就職をきっかけに四国中央市に来た。それが初めての一人暮らし。学生の時まではずっと実家に住んでいたの親に甘えっぱなしで、初めて一人暮らしをして、そこで四国中央市の人たちの温かさに触れたり、南を向けば山があるし北を向けば海がある、そういう自然の中ですごいなと。最初は正直、すごく四国中央市に行くのが嫌でくさいというイメージがあったが、そう思っていたせいか全然くさくないと思ったし、3年過ごして、今は新居浜で10年近く過ごしているが、お祭りは松山にもあるが、新居浜って街全体が店も休むしみんながお祭りに対して熱い思いを持っていて、10年ぐらいいると太鼓の音がすると「あっ。」みたいな感じになってきたりして、それこそ先ほど言われた STONE HAMMER にも去年参加して、すごく手づくり感のあるイベントで、家族で参加している人がすごく多かったので、これがどんどん大きくなればなあと思い、愛媛はすごくいいところだなと誇りに思っている。

学生の時に、ずっとテニスをしていて、中四国の大会で広島に行った時に、個人戦で試合で呼ばれる時は名前と大学名が呼ばれるが、大学名はどうしても省略して呼ばれる。愛媛大学だったので「愛大」って書いてるが、愛知大学と呼ばれた。中四国なのに。世の中には四国4県を言えない人もおり、知名度がもっと上がってほしいと思う。

【知事】

さっきの話のとおり、他人の庭は良く見えるんで、そんなに知名度が低いというわけではなくて、どこもそんなものなんです。やっぱり東京、大阪、名古屋、北海道、福岡と、こういったところは誰しも場所も名前もすぐに思い浮かべることができるけれども、あと観光地で京都とか、それ以外は大体同じようなものだと思います。

そういう中で、我々も情報発信にはいろいろと気を配って、その一環として昨年デジタルプロモーション戦略室というものをつくって、今かなり科学的にPR戦略をやっています。そういったこともあって、例えば愛知とよく間違われたのは事実なんでね。僕だって愛知県知事と言われたことがあったから、今度それを逆手にとって愛知でキャンペーンをやったんですよ。キャンペーンの名前は「愛知じゃないよ 愛媛だよ」というキャンペーンで、この間も愛知県知事にも協力してもらって、名古屋市長にも出てきてもらって「一緒にやろうよ。」と、「こっちはこっちで愛知で宣伝するよ。」というんでそんなことやったり、いろいろ仕掛けはしています。

結果としてかなり上がってきているのかな。先週も移住、都会で移住したい都道府県で愛媛県は10位に入りましてね、だいぶ上がったなと。実際数字的にもそれまでは、5年前は年間移住者280人ぐらいだった。去年は1,900人まで増えてきて、毎年増えていて、もちろん亡くなる方も多いで全体では人口は減っていますが、移住者だけを捉えると右肩上がりに増え始めて

いる状況です。

ここは大きな取組みをしまして、人口減少に少しでも対応するためには出生率を上げていく、外から来る移住者を増やす、こっちから外へ出る人を極力抑制するという3方向からいろんな仕掛けをしています。

愛媛県への移住では一番目立つのは、農業がやりたい、みかんをつくってみたいという人たちが都会から来るケースがあります。もう一つは愛媛県ってものすごい恵まれていると思います。数字的に見ても、例えば、これは松山になりますけど、空港に近い。都市部から外へ出る玄関口である空港に行くまでの時間が15分から20分なんですね。福岡と並んで最も近いんです。松山空港と福岡空港は。ほかの地域に行くと、大体空港までは1時間以上かかるというのが定番で、それが恵まれている点。それから災害が少ない。最近ちょっとありますけれども、西日本豪雨災害なんかでも全体的に見れば地震も含めて災害が非常に少ない。それから意外なデータは家賃、日本で2番目に安い。住むということに関して非常に恵まれた状況にある。それから通勤時間、これは日本で3番目に短い。ということは生活に割ける時間が非常に長く取れる。それから全部を思い出せませんがデータの的に見ても暮らしやすいということについてはすごく恵まれていると思います。

もう一つは食材が豊富なんですね。ぱっと思い浮かぶ郷土料理はないでしょう。なぜないかということを考えてみると答えが見えてくるんだけど、郷土料理が有名なところって意外と食材が限られています。限られた食材をおいしく食べるために工夫しなきゃということで生まれたのが郷土料理なんですね。ところが愛媛は恵まれ過ぎている。海に行けばさっき言ったように魚はごろごろいるし、いろんな山の幸にも恵まれている。里の幸にも恵まれている。まんべんなく全ての食材がそろっちゃう。だから何も工夫する必要がない。ありのまま食べれるってんで、そういう意味で豊富な食材がそろっているのが愛媛県の特徴です。

こういうとても恵まれているところですから、僕もずっと仕事をしていて、本当に恵まれていると思います。もう一つ言えるのは県民性が穏やかだからガツガツしていないんですよ。特に南予の1次産業の地域なんかに行くと、もっとガツガツしてなくて、「おじちゃんおばちゃんもっと高く売ろうや。」「ええのよ、ぼちぼちで。」と、そんな会話が飛び交ってしまう。「絶対価値があるからもっと高く売れるよ。」と言うと「ええのよ、食べていけたらええんじや。」というような会話が日常化しているし、それでも何とか引っ張ってもっと豊かにしたいなあとの思いで営業活動をやっているんだけど、そういうところから穏やかな県民性もあると思います。無理に宣伝する必要も、もちろん一生懸命やるけれども偽りの宣伝をしてもしょうがないんで、愛媛らしさを常に念頭におきながら効果的に知名度を上げる工夫はこれからも続けていきたいというふうに思います。

9. コロナ禍での企業支援について

愛知県から移住し、2年5カ月前ぐらいに愛媛県西条市に引っ越してきて、今地域おこし協力隊として西条市に13人、僕を含めているけれども、その全体の統括とか起業支援とコワーキングスペースの運営なんかもしている。

知事のお話で、全員コロナ対策でどういう優先順位でやっていくのか、生きたお金の使い方の話と、人口構造が今逆ピラミッド型になっていて、特に今コロナとかでしんどい家庭とかいろんな困りごとを抱えている人たちも増えている中で、新しい道を模索するという選択肢もあるという話を聞かせてもらい、僕自身が愛知県で農業を中心にしながらまちの活性化を目指しているという活動を10年くらいしていたけれども、それが今起業支援という次のプレイヤーを育てるという仕事につながっている。そういったソーシャルビジネスやコミュニティビジネスっていうものを、今地域おこし協力隊とかよそからやってきて取り組んでいると思うけれども、そ

れだけでなく地元のNPOとかそういった方々の支援を今後県としてどのように取り組んでいかれるのかというところが1点。

もう一つは移住の話があったが、家賃が安くて通勤時間が短い非常に暮らしやすい町だということで、西条市も移住政策を一生懸命やっている。全国で若者世代が住みたいまちNo.1とかにもなっている。僕らはコワーキングスペースを今1軒持っていて8月にはもう1軒多くしようと考えている。その中で東京の会社とかコロナの影響でリモートワーカーが非常に増えていると。富士通なんかはオフィス面積を半分にしようと。家賃も高いです。そういった流れの中でリモートワークをどういうふうに誘致していくのかといったようなことを、何か県と一緒にできたらなあというふうに思っているけれども、そのへんの考えをお聞かせいただきたい。

【知事】

まず本当に行政だけで何もかも社会保障を維持するというのはこれは無理だと思うんです。具体的な数字で分析していくと、現在若い人で働いている人でサラリーマン中心のデータですが、国民負担率、保険料とか税金とか100給料をもらってそういったものに拠出するのが大体38~40ぐらい。仮に机上の計算なんですけれども、現在ある福祉サービスや医療支出、保険制度を何も変えずにさらに少子高齢化が進むと、20年後に国民負担率70%に上げないと維持ができない。これはもう分かっているんです。じゃそれを回避するためには、さっきの答えになるんですけども、本当に70%まで税金をばあんと上げるか、消費税をどんと上げるか、サービスをばあんと減らすか、本当に放置していたらそれしかなくなってしまうんですね。これはずっと言い続けているんですけども、これは制度の問題、全体の問題なんで、本当は国会議員がこれを本当に議論してやらなければいけないんですけども、例えば負担を若干でも上げる、票が減るんじゃないか。福祉サービスをちょっとでも削る、選挙の時に票が減るんじゃないかと怖がって誰も言わないんですよ。だからどんどん先送りされているというのが現実なんです。

そういう中で地域でも考えていくしかないなというので、コミュニティの重要性というのをずっと訴えてきたんですけど、やっぱり支え合う力というのは都会よりもむしろ地方のほうがまだ残っているんで、その中で活躍するのが既存の町内会とかいう団体でありボランティアの団体でありあるいはNPOという団体であり、個々の力と行政がタイアップしてつくり上げていくしか方法がないんじゃないかなと思っています。

そうした団体に対するバックアップというのは一番困っていらっしゃるのが例えば資金的な問題なんです。そこについてNPO法人に対しては、企業等から毎年、ある程度定期的にいただいている寄付の制度があるんで、これをちゃんとした選考委員会で申請していただいたものから、いいものについてバックアップしていくという制度はつくっています。

もう一つは環境と福祉に重きを置いているんですが、紹介だけさせていただきますと、「愛媛県『三浦保』愛基金」というのを愛媛県が持っています。これは松山市に本社をおく三浦工業という会社、これは日本一の中小型ボイラーの世界でも展開しているメーカーさんなんですけれども、創業者の方はリヤカーを引っ張ってたたき上げでつくった会社なんです。その方が亡くなられた時に奥様が「ご主人の創業の思い、地域貢献だったので恩返しをしたい。」ということでご自身が持っておられた株を100万株県に寄贈をいただきました。県で株主になってやることになったんですね。この会社はどんどん成長してますから、今これが分割されて300万株ぐらいになるんですね。業績もいいですから県に毎年配当金をいただいているんです。これを原資にしています。これは愛基金として創業者の思いを具現化するためにちゃんとした委員会もつくって、環境とか福祉とか、さっきのが使えるかどうか分からないけどこういう活動をやっている、これはいいですねということで認定を受けたところにバックアップする制度、これは毎年その基金の中でやっていますので、かなりNPOやボランティア団体で活動をなさっている方には活用いただ

いています。

さっきの県のほうについてはもうちょっと細かい、金額は少ないですけども、立ち上がり間もない苦しい時にバックアップするというようなこともできますので、こういったことを大いに活用していただいたらいいんじゃないかなと思います。

それからテレワークについては、コロナというのは恐らく人々の価値観、それから働き方全てに影響を与えるコロナ後の社会への変化をもたらすものではないかなと思っています。その中でもうこれはすでに先取りしている人たちがいたんですけども、コロナの場合にも感じていたんですが、今治市の大三島に大阪のIT企業で働いている人が移住してきているんですね。この方は今でも大阪本社の会社に勤めています。ただし、住まい、日常生活は島です。で、見に行ったんですよ。どんな生活をしているか教えてということで。朝の8時半にテレワーク開始なんですよ。ユニットが8人ぐらいなんで8人の全体会議が始まるんですね。ズームを使っているとは思いますが。今日の地域での打ち合わせが始まる。大体30分ぐらいなんです。「今日は自分は昨日までの作業工程でこういうことができた。」と。「今日はこういうことをするつもりだ。」とそれぞれが言っていて、「実は自分はちょっとつついっばいになっているんで、誰か手伝ってくれないか。」と。すると「自分は余裕があるからいいよ。」ってそこでやりとりするんですね。今日やることをそこで決めてしまいます。お昼の1時間は休んで、あとはずっとテレワークで作業しているんですけど、夕方の5時に再び全体会議で、8人で今日やったことの確認事項があるんですね。どこまでできたと。「これで今日はOK。」というような日常なんですよ。夕方になると子どもが帰ってくる。それから、島ですから子どもと釣りに行ったりという生活をしているんですね。「実際どうなのですか。」と言ったら、奥さんがいらっしゃったんで奥さんは「隣の古民家を借りて今宿泊所を始めました。」と。すごく豊かな生活をされているんですね。なぜかという大阪の企業なんで給料は変わってないんですよ。家賃が2万円か3万円なんで、大阪時代は20万とか十何万の家賃ですから、そこでがば〜んと減っちゃった。夜の町に出ないから、というかないから交際費が全然いらぬ。その余裕のおかげで古民家を借りて改修して宿泊施設をやることにした。こういうライフスタイルってのは出てくるんだなと、それ見ながらつくづく感じました。

コロナの社会で、本社機能って何なんだろうと考えている企業がどんどん出てくると思います。そうすると、こうしたサテライト型のテレワークの働き方というのが広がっていく可能性が出てきた。もう1点、先取りしてそこに気付いた会社があるんです。

これは松山に昔誘致した会社なんですけど、東京が本社なんですよ。松山で福利厚生のある企業サービスをやる会社なんです。東京にいと人がなかなか採れないという理由で、十数年前に松山に来てくれたんです。当初の約束では松山市で300人か400人を雇用するということがあったんで、そこは順調にやりました。ごめんなさい、今のは別の会社だ。もう1社あるんです。デジタル関係の会社。こちらは会長、創業者が愛媛出身だったんで「何とか考えてください。」という形で松山に来てくれた会社です。これも非常にいい会社です。上場してますから。そのうちにその会社全体で1,000人になったんですよ。松山で300人雇って東京本社700人という感じを想定していたんですけど、今は松山が600人、本社400人なんですよ。逆転しちゃったんです。当初の計画ではそこまで考えてなかったんです。これは理由があるってんで、まず東京にいと人がなかなか雇えない。今だったらまた別の環境になっていますけれども。人材が来てくれない、地方に求めているということで来てくれたんですけど、さらに問題が起こったのは、東京で雇った場合に、当然新人研修で人材研修にお金を投入する、育った瞬間に同業他社に引き抜かれたりするんですね。投資しても投資しても人がすぐにとられてしまうという状況はもうだめだということで、さらにこちらを拡張するということを考えたんです。ただ松山だけでももう限界があるということで、2年ぐらい前から社長が考えたのは愛媛県の市町ごとにサテライトオフィスをつくると。最初は一番南の愛南町から始めました。今は上島町なんですよ。島ですね。去年サテライトオフィスをつくった。20人ぐらいずつの、サテライトオフィス。そこに全部ネットで結んで、本社が

あって愛媛県で主となるオフィスがあって、そこに今6つぐらい愛媛県の市町村に20人規模ぐらいのサテライトオフィスをつくり上げています。こういうやり方が当たり前になってくるのかなと。

実は今、愛媛県の産業経済の部署に、コロナ以降に企業の働き方も考え方も大きく変わるんで、今からこのテレワークやあるいは本社機能を含めて地方に引っ張ってこれるような環境が生まれる可能性が十分にあるということで、コロナが収まっていないからアプローチできないんですけど、戦略を立てることを指示を出しているんです。これが結果としてどう結び付いていくかまだ今の段階では分かりません。ただ、おっしゃるように、このコロナによって変わっていくであろう人々の価値観や働き方改革、これはチャンスととらえてアプローチをしていきたいなというふうに思っています。

10. 多文化共生社会の実現に向けてできること

昨年8月にマレーシアから来た新居浜市国際交流員です。

本日は多文化共生社会の実現に向けてできることについて、少し知事のお考えを聞きたい。

近年の日本社会では、この多文化共生社会というのが非常に大きな課題になっていると思う。都会、地方関係なく日本全国で外国人の人数が増えていて、この新居浜においても現在1,400人近くの外国人が存在している。私たち外国人のために少しでも暮らしやすい街をつくるために市や地域団体の皆様が本当にいろんなことに取り組んでいて、例えば昨年新居浜市国際交流協会の設立だったり、日本語の夜間教室の実施だったり、市のウェブサイトの多言語化だったり为例として取り上げることができる。それだけでなく、この1年間で、特にコロナで大変な状況の中で外国人が何かで困ってないかとか、私たちにできることはないかとかを聞きに国際交流協会を訪ねる方が増えている。こうやって外国人のために積極的に動いてくださる方たちがいるので非常にうれしいし、感謝している。

本来の多文化共生社会を実現するためにはツーウェイ、双方向の努力、つまり市や地域コミュニティ側だけではなくて外国人側からの努力も必要かと思っている。

そこで私たち外国人ができることは何かについて知事の考えを是非お聞きしたいのが1点。

2点目はこの際に生活上で困っていること、改善してほしいことなど提案はないかと他の新居浜市に住んでいる外国人に聞いたことを、この場を借りて責任をもって皆さんの声をお届けしたい。

3つある。まず一つ目、外国運転免許証の切り替えの手続きだけれども、愛媛県ではこの手続きをするのに非常に時間がかかる。アポを取るだけなのに半年、6カ月はかかるそう。隣の香川県に確認したところ、1、2カ月程度しか待たされないということだったので、どうして愛媛では時間がかかるのか、免許が取れなくて困っているという声があった。二つ目は、運転ができないので公共交通機関は主にバスを使うしかないけれども、バスの路線図とか時刻表が非常に分かりづらいと。あとバスの前に書かれている〇〇経由〇〇行とかは漢字でしか書かれていなくて、場所も分からない。その代わりにマップ上に番号があればいいのというご意見があった。最後に、病院の手続きだけれども、特に救急病院とか産婦人科の手続きの資料とか、申請書とかの多言語版をつくってほしいという声があった。普通の健康診断の場合だったら通訳と一緒にいけるかもしれないが、緊急の場合は通訳の手配はできないので言葉が通じなかったら命に関わることなので、そこら辺を何とかしてほしいと。是非関係者の方と意見交換ができる機会とか場をつくっていただきたい、という皆さんの声がある。よろしくお願ひしたい。

【知事】

日本という国自体が四方を海で囲まれている。陸続きの国と接しているわけではない。日本語

という特殊な言語でずっと歴史を刻んでいるので、非常に異文化との融合というか接触があまりない、経験則が少ない土地柄だと思うんですね。日本全体が。でもそんなことは言っていられないわけで、1980年代にインターネットが普及して、国境を越えるような情報のやりとりが可能になり、いつでもどこでも誰でも等しく情報を得られるようになり、時差を超えた貿易も可能になり、どんどん変わっていつているわけです。ましてや日本は資源もない。また食料も輸入することが多い。特に資源などは99%輸入に頼るような国で、そこで技術力で物事をつくっていく形をつけて対外的に貿易をして伸びてきた国なので、これがどんどん進んでいくことによってさらに海外との交流を深めていかざるを得ない状況になってきていると思います。ましてや今日本の国は全体で言うと1億2,000万人の人口なんですけど、少子高齢化によって人口が減り始めているんですね。減るということは、さっき申し上げた福祉の問題もあるんですけど、もう1個大きな視点は国内のマーケットが小さくなっていくということです。

ということは、国内だけに目を向けていると、どんどん商売は減っていくわけですね。だからそれをカバーするためには海外に目を向けなければならない。これは次の世代は今まで以上に目を向けていかないとならない。しかし、先ほど言った地理的な地水学的な特性によって異文化と交流する機会が若い世代は少ないんですよ。だから外国人としてこちらへ来ていただいた皆さんには特に若い世代、子どもたちに異文化の存在を身近に感じ取っていただけるようなそういう場を、どんどん出ていつていただいて経験させていただきたいなと思います。

例えば愛媛県の若者に聞いても愛媛県の学生そのものがパスポートをほとんど持ってないんですよ。12%ぐらいしか持ってない。ということは若いうちに海外に行くという機会もない。でもこの世代は、特にこれから今言ったような様相から海外とどんどんやりとりもする、共生もしていく、あるいは競争もしていくということが避けられない世代なので、そこはすごく心配しています。だから是非どんどん接していただけたらと思います。

マレーシアは特に自分にとっても思い出がある国で、幾度か行かせていただきました。

最初のきっかけは愛媛県のみかん、柑橘をマレーシアに売るということを目的に行って、そこから始まったんですね。そこで出会えたので、5年ぐらい前だったか引退していたマハティールさんと知り合うことができ、マハティールさんご夫妻が日本に旅行に来るというので、愛媛に来てくださいということで3日間ご夫婦で愛媛に来てくれる機会ができました。そこでマハティールさんが愛媛ファンになってくれたんですね。今治タオル、だいぶ買っていたんですけど、帰られた後に愛媛フェアをクアラルンプールのデパートでやったら、ご夫妻がお礼にと行ってテープカットに来てくれたんです。そこからマレーシアでどんどんやろうかなと思って、僕はもともとバドミントンの選手だったんで、マレーシアはバドミントン強国ですから、僕はリー・チョンメイのファンでしたから、オリンピック選手の事前合宿を誘致しようということにして、マレーシアのバドミントン協会にも交渉して、昨年から、残念ながら東京オリンピックはこういうふうになっていますが、マレーシアのナショナルチームが2回、ジュニアの代表チームが1回愛媛で合宿をしてくれるような関係ができました。これはこれからも生かして、落ち着いたら愛媛県のバドミントンの子どもたちとマレーシアのジュニアの子どもたちが定期的に何かできるような仕掛けで結び付けていけたらいいなと思っています。東京オリンピックでもマレーシアは日本のライバルになりそうだったんで、その場面を見たかったなあと感じていました。

今言った提言については、まず免許証の発行については、これは県の業務になりますのでどうしてそういうことになっているか分からないんですけど。

(東予地方局長)

県警本部のほうに聞いたことがあるんですけど、外国人の免許の切り替えなんですけど、実際愛媛県は年間200人程度いるんですけど、他の県は大体100名前後と言うことで、愛媛県が非常に多いんだそうです。またトラクターとかの技能試験なんかもあるらしくて、それなども非常に多いということで、どうしても件数が多いので火曜日と金曜日に限定して、やるのに資格者がいる

ということで、そういった形で今までやっていたんで非常に時間がかかっていたと。他の県では1カ月から2カ月待ちなのに、確かにおっしゃるとおり半年待ちという状況もあったということで、これはご質問があったからというわけではないと思うんですが、県警本部としては8月を強化月間ということで集中して切り替えるように取り組むということで進めているそうです。週2日だったのを毎日実施することにして、6カ月待ちの外国人の方には2カ月から2カ月半で全て解消させたいと努力したいというふうに聞いておりますので、今しばらくお待ちいただけたらということでございました。

【知事】

お仲間に、「8月は強化月間です。」と伝えてください。人数が多いんで2カ月ぐらいはかかるかもしれませんが、それは少しでも改善するようにやるということでございます。

バスは民間会社なんで、あと新居浜市さんの取組みもあるのかな。英語表記とかそういうことだろうと思いますので、これは俎上には上がって、バス会社等には伝えたいと思います。

それから病院、これは県立病院もありますので多言語化対応を。

（東予地方局長）

多言語化対応なんですけど、実は医療機関向けには厚生労働省もホームページでダウンロードできるようなシステムをつくっています。英語、中国語、韓国語、ポルトガル語、スペイン語と5カ国対応のホームページがあります。これはあくまで医療機関向けなので一般の受診者向けではないんです。ただ、医療機関に行けばそういった対応ができるようなシステムと手を組んで、そここのところをもう少し医療機関に我々からもしっかりと周知をして対応していただけるようお願いをしたいなと思います。

《補足説明》〔保健福祉部〕〔公営企業管理局〕〔警察本部〕

〔保健福祉部〕

県が県内の医療機関に関する情報を提供しているホームページ「えひめ医療情報ネット」では、外国語に対応できる医療機関の検索が可能となっています。

また、外国人患者対応を行っている県内の一部の病院では、昨年度、国の補助事業を活用して通訳機能等を備えたタブレットを整備したところ。

〔公営企業管理局〕

県立病院では、四病院全てに通訳専用デバイスを導入しており、緊急時であっても外国人患者への対応が可能です。

更に、外国人患者が多数来院する県立中央病院においては、厚生労働省のホームページに掲載されている「外国人向け多言語説明資料」を常時、備え付けることにより、各種手続用書類の多言語化に対応しています。

〔警察本部〕

外国免許切替審査については、従来は火曜金曜の週2日、午前午後1人ずつの計4人の審査を行っていたが、8月から現在まで、平日の午前午後1人ずつ、週計10人にまで拡大して審査を実施しています。

その結果、予約待ち人数は、当初100人程度から30人程度にまで減少し、予約待ち期間についても、6カ月から1カ月程度にまで短縮しています。

今後も可能な限り、曜日を限定せずに審査を継続し、審査予約待ちの縮小に努めます。